

## 昭和十七年の国民生活

この年は太平洋戦争に突入後、半年の間、日本は軍事的に優位を保ち、南方資源地帯の占領も進展した、また占領地からの物資補給の命綱である、船舶の喪失も少なく、緒戦の大戦果は国民ばかりでなく軍部・政府までも樂觀ムードに浸らせた。

それは、開戦と同時にマレー半島に上陸した、山下奉文の第二十五軍にシンガポール英軍司令官の、パシバル中将が無条件降伏するが、この時山下司令官が「イエスカノウか」と語気強くつめより、その迫力ある場面は全国民の血を躍らせた。

この年「職域奉公」「敵性語」「非国民」「欲しがりません、勝つまでは」などの語が流行した。

## 昭和十八年の国民生活

国民には知らされなかったが、前年末に大本営は「ガダルカナル島」からの撤退を決定した、以後「転進」と表現されるようになったが、次第に『転進』『転進』の語が聞こえるように戦況は悪化しつつあった。

二月には「撃ちてしまむ」や、「肉を切らせて骨を切る、骨を切らせて髓を断つ」と、言ったスローガンが横行した。

しかし、連合艦隊司令長官の山本司令官の戦死、アッツ島守備隊の全滅は衝撃であった。

夏から秋にかけてソロモン諸島にかけて攻防戦が展開され、労働力確保が急務となり、学徒徴兵猶予の廃止など、深刻な措置が事態の深刻さを表し始めた。

